

ことは今後のシステム開発の一つの方向を示すものであり、今後はさらに発展し、システムに関する知識が少ない人でもシミュレータのプログラムを容易にできるような開発環境が期待される。

### 3D2：医用応用

座長：中尾 恵（京都大学）

学会最終日、午前最後に行われた医用応用のセッションでは、医用 VR に関する計 5 件の発表があった。

それぞれ、遠隔手術における力覚フィードバックの影響の検証（九州大学）、柔軟体操作シミュレーション評価のための計測方法の提案（名古屋工業大学）、歯科用のバーチャル咬合器の開発（名古屋工業大学）、がん患者のためのメンタルサポートの試み（京都大学他）、痴呆性高齢者のための遊びリテーションシステム（大阪工業大学）と、基礎技術の提案・評価に関する報告からシステムの導入事例まで興味深い研究発表がなされた。

遠隔医療やシミュレータによる訓練・計画の実用化にはシステムの妥当性の証明が必要不可欠であり、今回の発表にあるような検証方法の確立を目指した研究に加え、医療現場における試用、導入事例の増加が望まれる。リハビリなど患者 QoL の向上を目指した研究は、新たな社会サービス・産業の実現に最も近い領域の一つと考えられる。ヒトの知覚・心理に関する基礎研究との連携、システムの設計や検証などに関する理論の確立が期待される。

## ◆第9回大会参加報告

平井 真

（京都大学）

今回初めて大会に参加させていただきました。

今年は京都大学のしかも 2003 年 12 月に改修を終えたばかりの時計台での開催ということで、日本バーチャルリアリティ学会の主催の先生方の進取の気性に富むところを拝見できたように思う。

発表は 4 会場に分かれて行われた。その中の一つの会場には専用めがねをかけることによって 3D 画像を見せるこ

とができる設備が用意されていた。実際にみる 3D 画像は迫力があり、まさにバーチャルリアリティの中でも成功した技術なんだろうと印象付けられた。発表はどれも多数の人々が集まり盛り上がりを見せていた。まだまだこの世界のことを知らない私にはどれも新しく勉強になった。

時計台の 2 階では企業展示、技術展示が行われた。中でも立命館大学の MR 技術を用いた桜吹雪の展示はきれいであり、人目をひいていた。扇子を用いて舞い散る桜の花を受けたり、風を起こして散らせることも可能であった。実験系の学会とは違い企業だけでなく、研究室単位で展示を行えることは実験系出身の私には新鮮であった。

2 日目の昼休みの時間（2 時間ほど）にオープンラボという研究室紹介企画があった。時計台ではなく京大の研究室に足を運び、移動が難しいシステムなども直接見ることができる企画であった。京大の四つの研究室がオープンラボを開いていた。その中に私どもの研究室もあった。ランチタイムと時間が重なっていたのにもかかわらず、正確な数はわからないが 60 人以上も参加していただけ、好評を博した。参加者の意欲的な姿が印象的であった。次回の大会でオープンラボが行われるのなら私もぜひ多くの研究室を体験してみようと思う。

大会を通して様々な貴重な体験ができた。ここに、大会の委員の方に感謝の意を表します。

嵯峨 智

（東京大学）

本大会は強力な台風 18 号のゆくえが心配された学会となったが、幸い期間中は好天がつづき、新しい世界を垣間見せてくれる様々な発表がなされた。この中で私が個人的に好きな発表を紹介させていただく。目的意識や、VR だからこそという点がはっきりし、周辺の現状が見えているもので、さらに発展の方向性が見える発表は聞いていてよいものである。

まず、VR という分野の、技術の複合体としての側面の代表として、下条先生（電気通信大学）の「触覚 GUI を可能とする視覚障害者用入出力装置の開発」が挙げられる。これは、これまで視覚障害者への情報出力用のデバイスだったピンアレイを、力センサを加えるだけで入力も可能にするものである。まさに組み合わせの妙によるアイデアであり、視覚障害者が GUI のメリットを享受できる、実用の可能性も高いものである。